

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（学術）	氏名	鄭 新爽
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論文題目			
中国語における時間表現に関する認知言語学的研究 ―日本語との比較を通して―			
論文審査担当者			
主査	准教授	町田 章	
審査委員	教授	吉田光演	
審査委員	教授	坂田省吾	
審査委員	教授	柴田美紀	
審査委員	准教授	大嶋広美	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本研究の目的は、空間の三軸（前後軸・左右軸・上下軸）を用いた中国語の時間表現の背後にある認知プロセスを日本語との比較を通して解明することである。そして、これらの考察を通して、人間はどのように時間を認識しているのかという問いに対して、概念メタファーだけではなく、それ以外の認知作用も関わっていることを提案するものである。</p> <p>第1章では、日本語と中国語に見られる空間表現を用いた時間表現に関する問題を提起している。続く第2章では、人間の時間認識（人間はどのように時間を認識しているのかという問い）に関する広範な先行研究の紹介とその整理を行っている。特に、認知言語学では、人間は空間領域の概念を用いて時間領域の概念を理解するという時間メタファー論が標準的なアプローチとなっているため、時間メタファー論の中で先駆的な役割を果たした Lakoff and Johnson の一連の研究と現在最も支持されている Moore の三分類時間論（ME メタファー、EMT メタファー、SEQUENCE メタファー）の紹介を行っている。第3章では、Moore の三分類時間論では説明できない現象が中国語には存在することを指摘し、その上で、Moore の時間論に認知主体の事態把握の様式（事態内視点・事態外視点）を組み合わせる必要があることを提案している。次いで、第4章では、左右軸に基づく時間表現に関して議論している。先行研究では、概念レベルでは左右軸を用いた時間認識が多く存在するが、言語レベルでは左右軸を用いた表現はないとされている。それに対し、本研究では、少ないながらも中国語には左右軸を用いた時間表現が存在することを指摘したうえで、概念レベルの左右の時間認識が言語レベルの時間表現にまで至るようになったのは、認知主体の身体の一部の客体化が起こったためであると結論づけている。続く第5章では、中国語の上下軸を用いた時間表現にはメタファーでは説明できない事例があることを指摘し、中国語の書字体系に動機づけられた順序認識が時間認識の背後に存在することを主張している。これまで時間認識であると考えられてきた上下の時間表現の中に、実は、順序認識に基づくものが混在しているという主張である。最後の第6章は本研究のまとめとなっている。</p> <p>従来の認知言語学的研究では、往々にして、概念メタファーのみに偏った研究スタンスがと</p>			

られてきた。しかしながら、本研究では、人間の時間認識はそれほど単純ではなく、事態把握の様式や主体化・客体化といった様々な人間の認知メカニズムが関係しているということを実例を挙げながら実証している点で独創的であり高く評価できる。特に、川のメタファーの問題を明らかにした点、左右軸を用いた時間表現が中国語には存在するという事実を発掘した点、上下軸を用いた中国語の時間表現が実際には順序認識に付随して起こった時間認識であるという指摘を行った点などは、今後の時間認識の研究において新たな方向性を拓くものである。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。